

青蘿発句注解 三

富田志津子

はじめに

本稿は、「青蘿発句注解 一」「同・二」(『姫路獨協大学外国語学部紀要』三〇・同三二、二〇一七年二月・二〇一九年二月、以下「注解一」、「注解二」と略称する)に続くものである。栗の本青蘿が生涯に詠んだ発句を、年代のわかるものは古い順にとりあげ、注解している。注解一で明和五年頃まで、注解二で安永元年頃までの発句を採り上げたので、今回はそれに続いて、安永初め頃から天明初年頃までに詠まれた発句を採り上げる。

加古川に定着し、蝶夢の傘下に入り、門人も増え、『蝸壺塚』を刊行したのが注解一の頃、蝶夢の蕉風復興運動の一翼を担って芭蕉顕彰活動を行い、また樗良とも交流をもつ。明和九年七月十六日に門人蘿来が没し、追善集『秋しぐれ』には、蝶夢との一周忌追善歌仙を載せた。そこまでが注解二。今回はそれに続く年代である。

一

安永元年秋、伊勢の樗良が加古川の青蘿を訪問した。その前年に青蘿が樗良を訪ねたが樗良は留守であった。その返礼としての訪問であろう。(富田志津子「『骨書』七歌仙」『俳文学報』五二、二〇一八年一〇月)。伊勢まで同行した蘿来が没した後であり、十月二十六日に、樗良、青蘿、半捨坊の三人で、蘿来百ヶ日追善歌仙を巻いた(『秋しぐれ』)。また樗良は翌年春まで青蘿の庵に滞在しており、その間に青蘿と樗良の両吟歌仙七巻を巻いた。①②③の発句はその両吟歌仙の発句である。樗良・青蘿の両吟歌仙は、「骨書の小集」として刊行されぬまま置かれ、樗良の七回忌を機会に李雨が『骨書』として刊行した。そのため同書の刊行は天明七年だが、樗良との両吟歌仙は、安永元年から二年に

かけて巻かれている。(以下、引用文や句の文字のうち、旧字体は現行に直し、濁点を補った。また、適宜、振り仮名も付している)

① 世のうきはうきともしらでうきはわかれの雪こかし、とうたひけり

たはれ女の頬先あかし雪の朝 青蘿

冬(雪) 出典『骨書』(天明七年、李雨編)

【訳】雪の降り積もった寒い朝、遊女のもとを去る。見送りに出た遊女は「世のうきは」と、唄を口ずさんでいる。その頬が、寒さで赤くなつており、いとおしさが増さる。

【注】前書の「世のうきは…雪こかし」は俗謡であろう、出典未詳。「雪こかし」は雪の玉、あるいは雪だるま。発句の「たはれ女」は、歌舞の女などをさす。この場合は遊女。寒さで頬先が赤くなつた女に、素人女のような田舎くささや子供っぽさを見出し、いとおしさを感じる。

『骨書』所収、樗良との両吟歌仙の発句。脇は「立るすがたは冬の芍薬 樗良」。

② 詠水上花

盃のながる、花の絶間かな 青蘿

春(花) 出典『骨書』

【訳】川面一面に浮かぶ桜の花びら、そこに絶え間があると見ると、盃が流れていく。誰かが、曲水の宴を真似て、盃を流したのでろう。

【注】曲水の宴は、三月三日上巳の宮中の行事。上流から流される盃が自分のところへ来る前に和歌を詠む、という遊び。それを真似て、句会を催したか。花びらの浮かぶ水の上を、盃が花びらを押し分けて流れていく、という光景を詠んだ。

樗良との両吟歌仙の発句。脇は「光りを添ふる岸の山吹 樗良」

③ 即興歌仙

節せちの日やあらかたひらく梅の花

青蘿

春(節日) 出典『骨書』

【訳】今日は季節の変わり目、立春である。すでに梅の花は、ほとんどほころんでいる。

【注】「節」は多くの場合、節句それも上巳の節句をさすが、それでは梅の季節にあわない。ここは、季節の変わり目の節日である。暖かい日が続いて、立春の前からはや、梅が咲きかけている。春の明るさ、軽快さを感じる。

樗良との両吟歌仙の発句。脇は「鰕えびがら光る背戸の春風 樗良」

④ 草の戸ひに灯ふきも吹ふけてして小夜しぐれ 山李

冬(時雨) 出典『しぐれ会』(安永二年、蝶夢編)

【訳】住すままいの草庵。夜に時雨が降ってきた、と思うと、一迅の風が吹いてわずかな灯火も消してしまった。

【注】『しぐれ会』「四来奉納 各題時雨」の部に入集。「時雨」の題詠で、そのわびしさを詠む。義仲寺の時雨会あひだり会に参加したのではなく、『しぐれ会』に投句したもの。

⑤ 鹿兎とに十とせ綱手にかへす今朝の春

春 出典『青蘿発句集』(寛政九年、玉屑編)

【訳】加古川(鹿兎川)にとどまって十年目の春を迎えた。流れる年月、巡る季節は、船を引く綱に寄せては返す波のようだ。

【注】「綱手」は船をつなぐ綱。「綱手引く」と和歌に詠まれることが多い。「寄せてかへす」のは、一般には波である。この句の場合、船の綱に返ってきたのは、波ではなく春。鹿兎に来て十年、春がまた巡り返ってきた、ということであろう。

『青蘿発句集』の刊行は寛政九年だが、青蘿が加古川に来て十年、ということから、この句は、安永四年三十六才の頃の作と想定して、ここに入れた。

⑥ 寝てや見んかづけてやみん萩の花
播磨山李
秋（萩） 出典『笠の露』（安永四年、琴之・鶴之編）

【訳】萩の花が満開だ。枝垂れて、滝のように咲いているのを楽しむには、寝転んで見上げるのがよいだろうか。それとも、肩にかけて見るのがよいだろうか。

【注】「かづける」は被ける。本来は、頭にかぶるといふ意味だったが、官人などが上から褒美をいただいて肩に掛けることを「かづく」と言うようになった。ここでは、美しい萩を、枝ごと肩にかけてみようという。萩は、枝が垂れるように咲く。

『笠の露』は文下追善集。追善俳諧の発句は蝶夢が詠んでいる。

⑦ 寒月や四条の橋を我ひとり
加古川山李
冬（寒月） 出典『ふたつ笠』（安永四年、除風編）

【訳】冬の月が煌々と光る夜、歌舞伎の顔見世も終わって人少なくなった四条大橋を渡っていくのは自分一人。月の光がますます寒く寂しい。

【注】「寒月」は「俳諧線車大成」（寛政十一年）に十二月のものとして掲出。冬の月は「徒然草」で、「すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けくすめる」とされ、寒々として人に見られることが少ない。「寒月」も同じだが、漢語である分、さらに冷厳さを感じさせる。「寒月」の古い用例は少なく、中興期になって「寒月や僧に行逢橋の上 蕪村」（『耳たむし』）がある。「四条の橋」は四条大橋で、付近の四条河原は、夏は納涼、冬は十一月に歌舞伎の顔見世があり賑わった。その四条大橋も、師走となると顔見世が終わって人が少なく、渡るのは自分だけである。

『二つ笠』は讃岐国観音寺に早苗塚を建立した記念集。蝶夢、諸九尼ら入集。

⑧ うかれ出て仇に雪喰ふ猫の妻
播州加古川青蘿
春（猫の妻） 出典『春興』（安永五年、斗醉編）

【訳】年が明けて春になり、猫の発情期になった。雌猫がまだ雪の残る戸外に出かけていき、恨めしいことに雪を食らって帰ってくる。

【注】「猫の恋」は、一月（「花花草草」）、または二月（「毛吹草」）、ここは、残雪があるので早春の猫の恋である。「猫の夫」「猫の妻」、交尾期に入った猫の雌雄どちらも「ねこのつま」というが、この句は「妻」だから雌猫。浮かれて出て行つては、雄猫と遊んで、雪にまみれて帰ってくる。

この「春興」には、蕪村、几董ら当時の名家の新春の吟が入る。青蘿はこれ以後、「山李」から「青蘿」へと号を改めている。

⑨ 色深し今年よりさく桃の花
春（桃の花） 出典『左比志遠里』（安永五年、一音編）

ハリマ山李改 青蘿

【訳】桃の苗木に今年初めて花が咲いた。待ち続けてようやく咲いた花は、深い赤で、美しい。

【注】桃は、淡紅色が多いが、種類によって、濃い紅色や白色のものもある。また「桃栗三年柿八年」ということわざがあり、桃と栗は、芽生えてから実を結ぶまでに三年かかるという。

【左比志遠里】は一音の俳論集。蕪村序、暁台跋。天・地・人の三巻からなり天巻は一音の俳論、地・人の巻には諸国の俳人の発句を収める。青蘿の句は、名家の発句を集めた部分に二句入集。もう一つの句は、『秋しぐれ』に初出。

ここでは、号が「ハリマ山李改 青蘿」と示されている。

⑩ 戸口より人影さしぬ秋の暮

播州 山李坊

秋（秋の暮） 出典『張瓢』（安永五年、江涯編）。『続あけがらす』（安永五年、几董編）にも同じ形で入集する。ただし『続あけがらす』は「青蘿」の号である。

【訳】秋の夕暮れ、一人で庵に居ると、寂しく、人恋しい。戸口に、夕陽に長く延びた人影が見えると、来訪者かと、うれしくなる。

【注】秋の寂寥感を詠み、芭蕉の「此道や行人なしに秋の暮」（『其便』）や「秋深き隣は何をする人ぞ」（『笈日記』）を思わせる。この句の場合、「秋の暮」は秋の夕暮だが、晩秋の寂しさも感じさせる。

『張瓢』は近江八幡の俳書、名家の発句の中に、青蘿の句も入る。『続あけがらす』は蕪村七部集の一。

⑪ 色かえぬ四十は人の松の花
春（松の花） 出典『後の真』（安永六年、魚潜編） 青蘿

【訳】いつも変わらぬままで初老を迎えたあなたは、松の花のように、百年の長寿をたもたれるでししよう。

【注】「松の花」は春の季語。春、新芽の先に雌花と雄花が咲く。季語としては一月とされる。また、「十かへりの松」つまり百年に一度花が咲く、とされ、長寿の祝賀の言葉となっている。「色かえぬ」は、松の常緑と、髪の毛のい魚潜の頭の両方をさす。あなたは、松の花のようだ、これからも長寿を保って欲しい、と言祝ぐ。

【後の真】は魚潜の四十賀集。魚潜は、朝来山大雲寺の僧で青蘿門人。同書は栗の本一門の俳書で、栗の本門人が多く入集する。

⑫ 落積し椿がうへの春の雨
春（椿・春の雨） 出典『後の真』 青蘿

【訳】春雨が静かに降っている。庭には、落ち椿が積もっているのだが、その上を、ただ静かに雨が濡らしている。

【注】『三冊子』に、「春雨は小止みなく、いつまでも降り続くやうにする、三月をいふ。二月末よりも用ふるなり。正月二月初めを春の雨となり」とする。それに拠ると、これは「春の雨」なので一月二月の頃となる。椿は、一月（『花火草』）または二月（『毛吹草』）。この句は、落ち椿がたくさんあるので、二月か。

【後の真】の巻末発句。

⑬ 梅ちりて古郷寒しおぼる月
春（梅・おぼる月） 出典『花七日』（安永六年、樗良編） 青蘿

春（梅・おぼる月） 出典『花七日』（安永六年、樗良編）

【訳】古郷である奈良には梅が咲き誇っていたが、それも散ってしまうと、何やら寒さを感じる。しかし、おぼろ月が出て、またちがった春の美しさを見せてくれる。

【注】「ふるさと」は、『古今和歌集』で、「ふるさととなりにしならのみやこにも 色は変はらず花はさきけり 平城天皇」「ひとはいさ心もしらずふるさとは 花ぞむかしのかにほひける 紀貫之」のように、奈良のこととして詠まれている。両者とも梅の花を詠んでおり、これらの和歌をふまえて、青蘿は古郷、奈良の梅の花を詠んだ。『花七日』は楞良七部集の一。栗の本門人が多く入集する。

⑭ 春雨や継木見に行く闇のおく 播磨山李

春（春雨・継木） 出典『雪の味』（安永七年、一幹編）

【訳】春雨が降ると、故人が継いだ継ぎ木がどうなったかと気になって、夜でも闇の中を見に行ってしまう。

【注】『雪の味』は豊後の蘭里の三回忌集。青蘿の句は、「追悼発句」の部に入る。

「継木」は、木の芽や枝を切り取って、他の木に合体させる。春行うことが多かった。『花花草』等みな二月とする。ここは故人の継ぎ木である。

⑮ 世をいたふ身はとしをさへわすれたりしに、ある人より法師は初老のはるに逢ひ

玉ふとて、衣服など恵まれけるに、さもありやとて

十徳のうしろに來たり今朝の春

春（今朝の春） 出典『青蘿発句集』

【訳】正月を迎えて、今年初老となった。十徳をもらって祝われ、何やら晴れがましく照れくさい。正月のめでたさは、その後からやって來たようだ。

【注】「今朝の春」は、元旦を祝って言う語。十徳は、俳諧師が外出着として多く用いた上衣。初老は四十。正月、初老の祝いに十徳をもらったのである。芭蕉の「誰やらが形に似たり今朝の春」（『続虚栗』）と同じく、衣服をもらった照れくささを詠んでいる。青蘿四十歳は安永八年として、ここに入れた。

①⑥ 木がらしや二葉ふたば呼よわる岡の麦
 播磨 山李
 冬(木がらし) 出典『嶋塚集』(安永八年、野牛編)

【訳】木枯らしが吹いている。その音は恐ろしく、山畑に蒔いた麦に、早く芽を出せと二葉を呼ばわっているようだ。

【注】「麦」の季節は夏。「麦蒔き」「麦の双葉」は冬。『毛吹草』で、「麦蒔」を十月とする。「山畑や麦蒔く人の小わきざし 大魯」(『蘆陰句選』)と山畑に麦を蒔く。「岡」というのは、山畑であろう。「蒔きつけし夜より鶴鳴く岡の麦 青蘿」(『青蘿発句集』)という句もあり、青蘿は、ここでも「岡の麦」を詠んでいる。

『嶋塚集』は、唐葵庵南江の七回忌集。南江は、備中笠岡に芭蕉句碑を建てようとして果たせず明和二年に没した。七回忌に門人らが建立、蝶夢を導師に招いて供養した、その記念集。青蘿の句は「四季発句」の冬の部に入る。

①⑦ 盃におのくがたよ散る桜
 播州 山李

春(桜) 出典『雪の声』(安永九年、凡夫編)

【訳】盃をあげているおのおの方、あちらもご覧あれ。あんなにみごとに桜が散っている。

【注】落花を楽しみながらの酒宴。盃を干すのに忙しい人々に対して、盛んに散る花へも目をやってくれ、というもの。

『雪の声』は、樗良が安永七年から翌年まで越後へ曳杖、その折の巻を中心に、当地の吟を集めたもの。青蘿の句は、「四季発句」の「花」題に入る。

①⑧ 糸梅や野に立横たちに人もなし
 山李

春(梅) 出典『続寒菊』(安永九年、杏廬編)

【訳】しだれ梅が野に立っている。美しく咲き、薫るが、そばには誰もいない。惜しいことだ。

【注】「糸梅」が不明、そのように称する種類の梅はなかったようだ。枝垂れて咲く梅、と解釈した。誰にも見られず、野にぼつんと咲いているしだけ梅。

『続寒菊』は、野坡門の俳書。編者杏廬は大坂の人。

⑲ 春(梅) 梅を見て居ればほどなく匂ふ哉
ハリマ 青蘿

【訳】梅が美しく咲いている。しばらく見とれていると、やはり梅の本意は香りで、馥郁と薫ってくるものだ。

【注】梅は、花の美しさと芳香、その二つが愛でられる。その本意を主張している。

『年の尾』は、樗良七部集の一。樗良が安永五年に上京した後に刊行した。樗良の亡くなる安永九年以前の刊。

⑳ 秋(秋立つ) 秋立や裸で寝たる腹の上
青蘿

【訳】今日は立秋。まだまだ暑さはきびしく秋の気配などどこにもなさそうだが、裸で昼寝していると、何やら腹のあたりが寒い。なるほど、腹の上に秋が来たのか、と納得することだ。

【注】立秋の頃は、暑さの絶頂期、涼しさなど感じられるものはないが、裸で寝していると薄寒さを感じる、とする。

㉑ 春(鶯) 鶯も虫にいやしき心かな
播磨青蘿

【訳】美しい声でさえずる鶯は人に愛でられているが、意外なことに虫を食べる。虫を見るといやしい心を動かすようだ。人はそんなことは知らない。

【注】鶯の、人に知られていない一面を詠む。

『浪速住』は、行脚俳人江涯の編、四季別の歌仙と発句を収める。青蘿の句は、春の部に出る。

②② 名月や松の名あらば妓王妓女
栗のもと 青蘿
 秋(名月) 出典『月の吟』(天明二年、あかしの浦栗のもと社中編)

【訳】舞子の浜の名月はまことに美しい。この松の木に名をつけるなら、「舞子」にちなんで、白拍子の妓王と妓女の名を付けたいものだ。

【注】「舞子浜」の項に出る句。源平の合戦場、須磨浦にも近く、平家物語に出る白拍子の名がふさわしい。
 『月の吟』は、栗の本門人らが、屏風浦から舟を出し、須磨、明石の月を愛で、連句を巻き、発句を詠じたときの記念集。明石の栗の本社中が上梓した。

②③ 一枝をきらば一指を切るべしと、武蔵坊が書ける制札の、光を今もうしなはずして、春秋の哀あはれをつけ侍る
 須磨寺や千とせの木々もけふの月 青蘿
 秋(今日の月) 出典『月の吟』

【訳】源平合戦ゆかりの須磨寺には、弁慶の書いたという制札が今なお残っている。長い歴史を見てきた古い木立も、今日の名月の光で明るく照らされている。

【注】須磨寺の梅の木には、弁慶の制札があり、「南面の嫩なほ、一枝をきらば一指を切るべし」と書いてあったと『一ノ谷嫩軍記』三にある。青蘿の句は、古い歴史をもつ寺を、明るく照らす名月を詠む。

②④ 雑魚汁ぞこじゆも月の今宵や須磨の里 青蘿
 秋(月) 出典『月の吟』

【訳】須磨の里で食事する。雑魚を入れた質素な汁だが、須磨で名月を愛でながら食すると、なかなか良いものだ。
 【注】十二吟連句の発句。舟から下りて食事している。

②⑤ 春の鴈たぎ立たさわぎては日を送る 播磨青蘿

春(春の鴈) 出典『雪の台』(天明二年、三叩編)

【訳】鴈が北へ発とうとして、このところ、集まって騒ぎ、日々を送る。そのように、自分も竹宝の訃報を知って、ただもう、おろおろとして日々を送っている。

【注】『雪の台』は五器庵竹宝の一周忌追善集。各地から寄せられた追悼句の中にこの句が入る。

おわりに

今回は、安永年間と天明初年頃の青蘿の発句を注解した。入集する俳書は、蝶夢系か樗良系のものが多い。蝶夢と青蘿の關係は、拙稿「青蘿と蝶夢」(関西大学『国文学』一〇二、二〇一八年三月)で、樗良と青蘿の關係は「『骨書』七歌仙」(前掲)で述べた。浪人になり、俳諧師となつて、加古川に定着した青蘿であつた。もとの師の玄武坊は関東にあつて頼れず、蝶夢の傘下に入り、樗良との關係も大切にしながら、栗の本の俳壇を經營していったのである。この頃、栗の本門人も増え、『後の真』や『月の吟』のような、一門の俳書も刊行されている。栗の本門は着実に播州に根付いて、大きくなりつつある。

安永期の作風は、明和の頃の発句ほど芭蕉の句を意識していない。古典に典拠をもつものは少なく、日常の中で何気ない風景を何気なく詠もうとしているようだ。「梅を見て居ればほどなく句ふ哉」・それは、「かるみ」といえるのかも知れないが、駄句の排出につながる危険性がある。今後の青蘿の句風がどうなっていくのかは、次稿以降で考察する。

The Notes of Seira's Haikus III

Shizuko TOMITA

This is the third study of “The Notes of Seira's Haikus” series.

It wrote the notes on the haikus composed by Seira Kurinomoto roughly between 30 and 42 years old. In those days, Seira settled in Kakogawa, increasing the number of his pupils as a haikai master. He took part in Chomu's activity to praise Basho.

Also, he became friends with Chora who came from a famous family.

Seira himself was getting famous at that time.